

たかはしたかのぶ

高橋孝信

1951年水戸市生れ。東京大学大学院博士課程中退。四天王寺国際仏教大学文学部助教授、東京大学大学院人文社会系研究科助教授を経て、現在、同教授。

専攻 タミル文学

主な著書

Tamil Love Poetry and Poetics, E. J. Brill, Leiden/New York/Köln, 1995.

『ティルックラル——古代タミルの箴言集』（訳注）、平凡社東洋文庫、1999年。

エットウトハイ 古代タミルの恋と戦いの詩 東洋文庫 765

2007年8月10日 初版第1刷発行

訳 者 高 橋 孝 信

発 行 者 下 中 直 人

印 刷 創栄図書印刷株式会社
製 本 株式会社 石津製本所

電話編集 03-3818-0742 〒112-0001

発行所 営業 03-3818-0874 東京都文京区白山2-29-4

振 替 00180-0-29639 株式会社 平 凡 社

平凡社ホームページ <http://www.heibonsha.co.jp/>

© 株式会社 平凡社 2007 Printed in Japan

ISBN978-4-582-80765-3

NDC 分類番号 929.8 全書判(17.5 cm) 総ページ 348

乱丁・落丁本は直接読者サービス係でお取替えます(送料小社負担)

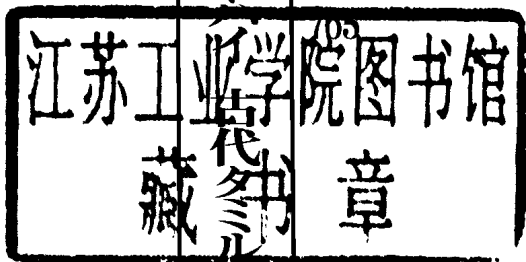


205880

日文 701680189

東洋文庫

エトウト



現代の恋と戦いの詩



高橋孝信 訳

平凡社

日本評論社

第一圖書

財団法人日本科学協会

装
幀
原

弘

凡 例

- 一 本書は南インド・タミル古代（後一―三世紀）の恋愛詩と英雄詩からの選集である。
- 二 文中の「」内の語は訳者が補ったものであり、（ ）内は言い換えまたは簡単な説明である。
- 三 タミル古代文学は高度に様式化している。その理解に供するために、作品番号に続けて、その作品の主題や作者名を記した添書を訳出しておいた。ただし、添書は作者とは別の人物によって後代につけられたものであり、作品内容とは異なる内容を記述していることもあるから注意されたい。
- 四 本書では振り仮名を多用している。振り仮名が「ひらがな」の場合は通常のものであるが、「カタカナ」の場合はタミル語の原音を表している。（例）鷺^{さぎ}／栗^{デイトイ}
- 五 動植物名は学術的にはカタカナ標記であるが、訳文では慣例にしたがい漢字表記もしてある。
- 六 訳注における略号あるいは文献については、「解説」末尾を参照されたい。

はじめに

インドには数百の言語があるが、それらのうち二〇〇〇年以上にわたって用いられているのは、インドの雅語サンスクリット語と、タミル語である。

本書は、そのタミル最古層の文学からの選集である。書名に『エットゥットハイ』（八詞華集）とあるが、本書に収録したのは、八詞華集のなかの古代を代表する五つの詞華集の作品である。それらの時期はおおよそ紀元後一―三世紀頃（アイングルヌールのみ四世紀頃）、場所はインド亜大陸の半島先端部、今日のタミル・ナードゥ州とケーララ州との両方にまたがる地域である。両地域にまたがるというのは、九―一〇世紀頃に今日のケーララ州の公用語であるマラーラム語がタミル語から分離するまでは、ケーララ州に相当する地域はタミル語文化圏であったからである。

内容は、男女の愛を主題とする恋愛文学と、王や族長を中心に据え、戦い・世の儂さ・世の習いなどを描く英雄文学との二つである。いずれも、それらの背後にある古典文学の約束事を通じていまいと十分な理解は難しい。その詳細は「解説」に譲るとして、ここでは簡単に触れておこう。

恋愛文学は、作者である詩人が、己の恋情を読者や聴衆に向かって語りかけているのではなく、ある恋物語の登場人物の一人が他の登場人物の一人に語るとい形式をとっている。すなわち、恋する男または女、各々の友人、女の母親、女の乳母、遊女などのうち、例えば、女が自分の友

人に語るといふようになってゐる。ただし、個々の作品は、劇のように恋物語のさまざまな局面を描くのではなく、ごく限られた小さな局面のみを描いており、発話はつねに独白であり、対話は存在しない。先に「恋物語」と言ったが、実際には、このような数百ある恋の限られた局面（場面）をつなぎ合わせれば、あたかも一つの恋物語のようになるというのが正しい。

そして、これらのどの場面で誰が誰に語るかも決まっている。そのような決まりに通じるにはかなりの熟練を要するから、本書では、誰が誰にどのような状況で何を語っているかを端的に記した添書を訳出してある。ただ、この添書は、作者自身が添えたのではなく、作者とは別の人物が後代に添えたものである。したがって、添書の記す内容が作品自体と異なっていたり、作品が述べる以上のことも述べていたりする場合もあり、添書を先に読むのは、作品理解にとって好ましくない場合もある。

タミル古典恋愛文学の特徴はもうひとつある。それは、それらさまざまな恋の局面を、山地・海辺・荒野・牧地・田園という五つの固有の地勢やその地の動植物、季節、時間等と結び付けて描くということである。山地や海辺を背景とする歌は結婚前の愛の諸相を、荒野を背景とするものは駆け落ちや愛し合う二人の別れを、牧地を背景とする作品は旅立って行った男の帰還やそれを待つ女の不安を、そして、田園を背景としていれば遊女をめぐる愛の動きを描いている。したがって、わが国の俳句における季語のように、それら五つの地勢と関わるなんらかの語、例えば荒野に特有のある植物が描かれていれば、タミル恋愛文学の読者あるいは聴衆は、その作品の主題が別れであることがわかるのである。

恋愛文学に対し、英雄文学の約束事は少ない。と言うよりは、恋愛文学と較べると資料が少なく、約束事はつきりとは分らないと言うのが正しい。ただ、詩論では、英雄文学は幾つかのジャンルに分けられ、それぞれのジャンルに小テーマが多数結び付けられている。これらのジャンルならびに小テーマは、時代が下るとともに、緒戦から城の攻防、激しい戦い、両軍の将による一騎打ち、戦いのあとの哀歌、無常感というように、恋愛文学同様に、戦いに関する一連の物語のように理論化される。本書では、英雄文学の各作品のジャンル、小テーマ、誰（詩人）が誰（王や族長）を歌ったかを記した添書を訳出してあるが、それら添書は、作品よりはやや時代の下る文学伝統を反映している。

また、英雄文学では、恋愛文学と異なり、特定の土地・季節・時間と結び付けて固有のテーマが描かれることはない。

訳者は長きにわたってタミル古典研究に従事してきた。しかし、今回の訳読作業を通じて、タミル古典研究にはまだまだなすべきことが多いことが分かった。個々の語句はもとより、植物名、衣食住を含む古代社会の様子なども分からないことが多い。タミル古代についての最も重要で豊富な資料は、古典文学である。したがって、本書（ことに訳注）でも、古代社会の理解に資するように意を用いてある。その際、根拠不十分なまま、古典を解釈し断定するようなことは避け、現段階で分かることと分からないこと、例えば貨幣経済について古典文学から分かることは何かなど、できるだけはつきり書くことにした。そのため「何々については、はつきり分からない」と書くこともしばしばある。

翻訳は、対象とする言語と母語に通じていなくては本来かなわない。また、本書のように、原作が詩歌である場合は、訳者は詩人であることが望ましい。その意味では、本書の訳はなはだ拙いと言わざるを得ない。他方、翻訳は言葉に通じるだけでは十分ではなく、博物学的知識がなければできない。かといって、にわか仕立てで博物学者になれるわけもなく、また、関連するすべての分野のあらゆる書物を身の回りに備えておくのは不可能に近い。そのようなとき、あくまでも諸学への足がかりとして、ネット検索は有効であることも新たな発見であった。

本書の出版に当たっては、一九九九年に上梓した『ティルックラル』（東洋文庫300）と同様に、トヨタ財団の「隣人をよく知ろう」プログラムの翻訳出版促進助成を受けた。本書が出るまでには、企画の段階から数えると優に一〇年を超えている。この長い期間、完成を待ち、このような作品を世に出す機会を与えてくれた同財団に謝意を表したい。また、企画から完成にいたる間には多くの人々にお世話になったが、ことに完成まで長い間辛抱強く付き合って下さった平凡社東洋文庫編集部、保科孝夫氏には感謝したい。

二〇〇七年七月

高橋孝信

目次

はじめに 4

クルンドハイ 11

ナットウリナイ 73

アハナーヌール 107

アイングルヌール 159

プラナーヌール 191

解説(高橋孝信) 301

エ
ト
ウ
ト
ハ
イ

古^こ代^{だい}タミルの恋^{こい}と戦^{たたか}いの詩^{うた}

高^{たか}橋^{かは}孝^{した}信^{かのぶ}
訳

本書を、義父^{ちち}宮田^{けんいち}鎌一^{けんいち}（二〇〇七年五月一七日没、享年八二）に捧ぐ。

クルントハイ *Kuruntokai*

クルンドハイとは「短い〔作品の〕(kurun) 集まり (tokai)」の意味である。もともとは四一八行の恋愛詩が四〇〇あったと思われるが、今日伝わるテキストには一七五名の詩人による四〇一の作品の他に Peruntevanar の神への献歌が含まれ、第三〇七と第三九一詩は九行からなっている。後代の奥付によると、編纂者は Purikko とされるが、誰が編纂させたのかは未詳である。全編に古い注釈（年代未詳）がついている。

四〇一の作品の配列には、他の詞華集のようになんらの工夫も見られないことから、古典のなかで最初に編まれた詞華集と考えられる。古来「よきクルンドハイ (nalla Kuruntokai)」と呼ばれ、さまざまな詩論や注釈、また近代の研究でももっとも頻繁に引用される。

五 別離の間に、女が耐えられないだろうと「思い」心配する友人に、

女が語ったこと。(Nari Verūtatalaiyar 作)

ねえ、これは恋の病なの？

そこに巣くう鷺⁽¹⁾が眠る、心地よい木陰のあるブンナイ樹⁽²⁾に碎けた波の飛沫⁽³⁾がかかり、芽吹いたかのように見えるそんなひんやりした水の、穏やかな海辺のあの人が去るやいなや
化粧を施した花のような目⁽³⁾が、眠ることもできなくなるなんて⁽⁴⁾。

(1) 「鷺」の原語は *kuruku* で、TL によると「サギ、トキ、ツル」で、学名を出していない。
わが国でも、トキ科のヘラサギなども含め、サギ科の鳥を総称してサギと呼んでいるから、こ
こはそれになった。

(2) プンナイ (*punnai*: cf. *Skt. pumāga*) は、学名 *Calophyllum inophyllum*, 英名
Mastwood/Alexandrian laurel, 和名テリハボク。古典文学では、その純白の花、黄色(金色)
の花粉(アハナーヌール二三〇参照)、輝く緑の葉、芳香がしばしば描かれる。「花綴り」192-
94」によると、もともとは海岸に好んで生える木で、マラバール海岸(インド南端の西海岸
部)に特に多く、高さ一八メートルくらいになる中高木で、五、六月頃、濃緑の葉をバックに、
芳香ある四弁の純白の花を咲かせると言う。

(3) 「化粧を施した目 (unkan)」とは、下瞼にそって黒く墨をひいた状態であるが、化粧を意識させることなく自然に切れ長の目に見えるのが美しいとされる。その形は、しばしば槍の刃先に譬えられ、女の美しさを示す定型句の一つとなっている。

(4) 「目が眠る／眠らない」とは、アハム文学でよく出る表現である。これは女とその目とを別物(別人格)のようにする文学的手法によるもので、「私は大丈夫だが、私の目が勝手に悲しんで涙を流している／眠らない」ということを示している。例えば、クルンドハイ三五では、女が「私の目は恥を知らないこと。〔あの人が旅立った〕あの日には〔別れに〕同意しておきながら、(中略)冷たい北風の吹く季節になると、別れ去っていったあの人のために泣くなんて」と言っている。

八 女が自分の陰口を利いていると聞いた遊女が、女の周りにいる人た

ちが耳にするように語ったこと。(Alankuñ Vankanār 作)

田のマンゴーの木から、熟して自然に落ちる甘い果実を

沼のヴァーライ魚が啜え去る

そんな村のあの人は

私たちの家では大きなことを言いながら

自分の家では、手足を上げると上がる、鏡の中の操り人形のように自分の息子の母親の意のままに振舞っている。

- (1) ヴァーライ魚 (vajai) は、TLによると学名 *Wallago attu*, 英名 Freshwater shark で、ナマズ的一种。美味で大きいものは一・ハメートルにもなると言う。
- (2) この部分は、田園地帯 (marutam) が勞せずしていつも新鮮な收穫のあることを示している。また、甘いマンゴーの実^①は女や遊女を、ヴァーライ魚は男を暗示している。

一六 富を求めて男が旅に出たとき、女の耐え難い苦しみを見て、女の友人^②が言ったこと。(Palai Patiya Perunkajunko 作)

ねえ、あの人は何も思わないのかしら。

鉄の矢尻を手入れする追剝^①が、

その刃先を何度も反^{かえ}しては爪で研ぐ、

その音のような鳴き声で、足の赤いトカゲが連れ合いを呼ぶ^②。
そんな幹の美しいカッリ樹^③のある、広漠たる荒野を行くあの人は。